



課題の取組 (前期を振り返って)

日本バプテスト連盟全国壮年会連合 会長 大城戸一彦

わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです。いや、今でもできません。(コリントー 3章2節)

2012年4月から、壮年の皆様からの推挙により全国壮年会連合会長として2年間の任期を務めさせていただきました。その間、皆様からの温かいご支援に支えられて、どうにか任期を終え、引き続き新しい任期に入らせていただきました。感謝です。

2年前を振り返って見ますと、任期開始時点で、前役員から「今後の全国壮年会連合活動について」と言うワーキンググループによる答申書がそっくり手渡され、その対応から取り組むこととなりました。

新しい任期を迎えた今、答申書を振り返って見て、やはり神様は全国壮年会連合の力に応じて、少しずつ導いてくださったとの思いを実感します。その時は大上段に振りかぶって、課題を瞬時に切り刻むつもりでした。しかし、わたしたち役員会には、限られた予算と人的パワーのバランスを超えて進めるだけの「力」が与えられていないこと、「意欲」を緩めることなく持ち続けることの難しさを実感する2年間でした。そのような中で、まずできる所から手を付けることに方針を転換せざるを得ませんでした。パウロがコリントの信徒に出した手紙のように、神様は、その業を担うものの信仰を見て「やわらかい食物」を用意してくださいったわけです。しかし、そのみ言葉を都合よく解釈し、言い訳に使用している自分を見ると、反省させられることが多い2年間でもありました。

2012年3月1日に提出された答申書「今後の全国壮年会連合活動について」によって、「伝道者養成」と「教会形成を担う壮年」の働きと、「組織・財政に関する提案」について大きな課題を示されました(全国壮年会連合ニュースNo. 71参照)。

特に「伝道者養成」と「教会形成を担う壮年」の働きについて、その取り組みの振り返りと新たな年度の方向性について思うところを記述したいと思います。

1. 「伝道者養成」の働きは、「伝道者・後継者養成」と言う視点で全国の壮年が思いを共有し、働きを協働できるような方向を具体的に示すべきであるとのことご提案でした。役員会主導ではありませんが全国壮年大会の主テーマとして毎年、充実したプログラムをもって地方連合の壮年会が組んでくださり、課題共有の場として一定の評価を得ているのではないかと思います。しかし、参加された壮年がご自分の教会にこのこ

とを持ち帰ったとき、課題を共有し、「伝道者養成」の働きに結び付けることの困難さについては実感しています。2014年度はその解決のためのツールを全国壮年会連合ニュース紙面に掲載いたします。亘高叶常務理事がこのために、「献身者を起こす教会・伝道所、献身者を育む信徒運動」として「献身のたまたま」を読者の壮年の方々に投げかけ、例会等で会員同士が活発な意見を交換するための題材を執筆してくださいます。(本誌3ページに掲載) 連盟の課題でもある「伝道者養成」の取り組みのため、まず、壮年が教会内での立ち位置をしっかりと確立し、「神のために力を合わせて働く者」(コリントー 3:9)に相応しく信仰を成長させることを支援するため、5回シリーズで提供いたします。これをもとに教会内で活発な議論が起こされることを祈っております。

2. 「教会形成を担う壮年」となるために、まず、壮年大会の研修時間(プログラム)の充実のため、一方法として壮年大会を隔年ごとに2泊3日で行うことが提案されました。現状の大会の運営は各地方連合壮年会に持ち回りで担当していただいているので、この運営システムを変えることができるのかどうかカギとなりますが、地方連合担当で行うことにより、自連合内からの参加者(壮年に限らず)が出席し易くなり、信徒活動の活性化につながるメリットとのバランスの上で考えなければなりません。ご提案の趣旨は理解できますので、この方向に向かいたいとは思いますが、まず、当面は、担当する地方連合壮年会の事情により一泊二日とせざるを得ない状況下であっても、大会開始時間を繰り上げる、あるいは終了時間を午後繰り下げることで、実質二泊三日に匹敵するプログラムが組めないか検討をお願いしております。

また、教会内外で生き生きと活躍されている壮年の姿を全国に紹介し、人材バンク的にいただいている賜物を各教会で生かす仕組みを作ることも提案されました。手始めに、全国壮年会ニュースで4名の方(都合8回)に証をしていただきました。地方連合によっては社会問題等の研修会に、講師として取り組んでおられる壮年を招いておられます。そのような方々のご紹介も含めて、他の課題と共に、皆様にご報告していきたいと思っております。以上



福岡地方連合壮年会神学校献金推進委員 馬場 和幸 (平尾バプテスト教会)

主の御名を賛美いたします。福岡地方連合壮年会の神学校献金の推進活動について、述べよという題を頂きました。福岡地方連合壮年会は、第48回全国壮年会大会を昨年8月に福岡で開催する準備に邁進する為、本来改選時期にきていた役員人事を先送りしまして、私が委員に選出されたのは、10月21日の事でしたので、今までの活動については、詳しく述べる事ができませんが、私の所属する平尾バプテスト教会での活動を中心にお伝えし、今後の福岡地方連合壮年会での神学校献金の推進の方策を述べてみたいと思います。平尾教会壮年会は、20名(会費納入者)名簿中の在籍者は40名ぐらいです。西南学院大学神学部の地元でもあり、昔から神学部や神学生を身近に感じておりまして、今までも多数の研修神学生を受け入れてきました。献金目標額は、この4-5年は60万円です。平尾教会の神学校献金は3本の柱を中心に、成り立っています。

第1の柱は、6月の神学校週間の礼拝において壮年会役員が献金のアピールをし、この日の席上献金の全てを神学生支援の献金に捧げています。

第2の柱は、年間を通して献金を教会員に呼びかけ、特別献金として、毎月均20口、その内御夫婦での献金10口月約3万円を捧げています。教会員の神学生に対する祈りの強さを感じます。平尾教会は2012年に完成した大名クロスガーデンがありますが、そこでは九州バプテスト神学校が二階で授業を行っています。西南学院大学神学部と九州バプテスト神学校を覚えつつ、神学校献金に励んでいます。

第3の柱は壮年会の会費です。月千円ですが、目標額に足りない時は、会費の半分以内で補充をします。その他バザーでの販売の一部やコーヒーの売り上げなど神学生支援にあてています。以上が平尾教会での活動です。今後の地方連合での献金推進の方策ですが、まず6月の神学校週間には、神学寮において神学部の先生および神学生とともに、神学校週間礼拝を守っていますので、参加教会数および参加人数をふやすべく、役員の皆様とともに、呼びかけたいと思っています。又壮年会役員と神学生の意見交換の場を持ちより、よい関係を築き支援を進めたいと考えています。又諸教会との話し合いの場を多く持ち、神学校週間のみでなく、年間を通した献金が捧げられるようお願いしたいと思っています。なにより、神学校の先生および神学生が夏休み等の時期を利用して、全国の諸教会に出向き、交わりの時を持つことができるよう支援の体制を強化したいと思っています。そのことにより神学校への理解が深まれば、献身者および献金額が目標に近づくことだと確信します。すべての献身者の必要が満たされることを祈りに覚えつつ。アーメン。



身にしみつき、しみこむまで

西南学院大学神学専攻科 川端恵実 (推薦教会：神戸バプテスト教会)

先日2014年3月20日をもって西南学院大学神学部神学コースを卒業することができました。学部卒業後は、神学専攻科へ進みます。このように神学部で学ぶことができますのも皆様のお祈りと奨学金によるものです。全国諸教会・伝道所の皆様に、この場をお借りして感謝とお礼を申し上げます。

一昨年、神戸教会の推薦の下で学士入学をし、それから早くも2年が経ちました。依然として「神学」に慣れはなく、未だ神学の難しさに戸惑いを隠せずにはいます。卒業式を終えて母教会の神戸教会へ約半年ぶりに帰りました。なぜだか急に安心し、涙が止まらなくなりました。これまで抑えてきた言葉にならない思いが溢れ出たようでした。振り返れば学部2年目は、これまで信じてきたものが壊され、自分の弱さに気づかされて、躓き倒れつつも何とかゴールをした年でした。荒海の中でも主が確かにおられ、私の体と心と魂を御手で守り、愛と信仰と希望とを保たせて下さったことを主に感謝しています。

また今回の帰省を通して、これまでの歩みは、決して自分一人の歩みではなかったということを確認することもできました。神戸教会での私の報告を聞いて共に涙を流して下さる方、「遺言よ」と言って宿題を課しつつ背中を叩いて下さる方など、神戸教会には私を励まして下さる方が多く待っておられたからです。

私は今一度改めて神戸教会の歴史をもっとよく知りたいと思いました。大学の図書館へ行き、保存されている神戸教会の資料を開くと、そこには開拓当初からの資料がまとめられていました。シェラー宣教師が神戸の地に派遣されたことを伝える記事や戸川隆牧師の説教文に私は大いに励まされ、お二人が私のことを覚えて励まして下さっているように感じました。何もなかったころ、戦後の焼け野原から現在の神戸教会が建てられたこと、多くの教会員の方々による血と汗と涙のにじむ苦労があったことを胸に焼き付けたいです。

資料の中には、このような面白い文章もありました。「人間は忘れる動物。いざとなると出てこない。知っていても1回と10回、20回はまるで違う。身にしみつき、しみこむまで。」春から専攻科の学びが始まります。神戸教会から送り出された者としての意識と感謝をもって、また0からスタートする気持ちで勉学に取り組みたいと決意を新たにしています。



その1 「断」

日本バプテスト連盟常務理事 吉高 叶

献身者が起こることを祈り、献身者たちを支えて行こうとする私たちは、当事者たちに何が求められ、どのような葛藤が起こっていくかということについて、ぜひとも思いを寄せていきたいのです。なぜなら、献身は、私自身の問題でもあるからです。

献身を決意し、神学校で学んでいこうとする者たちが、たちどころに問われるのが「自らのたたずまい」のことです。私は、この献身者のたたずまいを「断」「受」「専」「委」という四つの文字で理解しています。このシリーズでは、その一つひとつを、献身当事者たちと共有していくことを通して、伝道者養成を祈り、献身者を支える者としての姿勢を見つめ直していきたいと思えます。

まずは「断」です。これは「断絶」の断であり、「断念」の断であり、そして「決断」の断です。献身には断ち切る覚悟が求められます。自分の願望の延長線上で献身はできません。また自分の経験の上に献身を積み上げるのでもありません。むしろ、自己の願望を断ち、自分の経験をいったん捨てる、そうした断絶や断念を迫られるのです。献身するとは、自分にとってそれまで重要であった何事かを断ち、福音宣教と教会形成のために生きる道へと「生」を限定し、集中させ、そのために準備していく決断をすることだと言えます。そして、こうした「断」としてのたたずまいは、牧師になってからますます問われていくテーマだと言えます。

たとえば牧師は、赴任した教会で、何よりも説教という「ことば」を取り継ぐ仕事を託されます。説教は、単なる聖書解釈ではありませんし、心に残るエピソードでもありません。社会的問題意識の提示でも、心理学的な人間考察でもありません。経験談などは同じ聴衆に5回も語れば話は尽きてしまうのです。自分が語りたくないことではなく、聖書が語ろうとしていること、を聴くのです。自分の思い（ことば）を断つという、実に不安な状態に自らをさらさねばなりません。怖いことですが、毎週、そこから始めていくのです。「断」なしで向き合った聖書は、語り始めてくれないのです。説教を語るという仕事は「断」から始まります。

牧会の現実、人間の喜怒哀楽との向かい合いです。人生の四苦八苦への寄り添いだと言っても過言ではありません。牧会には、その中で一人ひとりを主イエスへ結びつけていく仕事です。人々の抜き差しならない問題に立ち入らざるを得なくなります。同伴していると自分に

火の粉が飛んでくることがあります。けれども、逃げ出せません。もとより、関わるならば逃げ出さない覚悟が問われます。裂け目に立って主の回復と癒やしを乞い求め続けるのです。ここでも逃げ場を断つという「断」が必要です。

牧師は、教会形成のリーダーとして、役員や会衆と共に事柄を積み上げていきます。そして時を得て大きな計画に踏み込まねばならない場面に出くわします。そのときに、教会員と共に責任（場合によっては債務）を背負う決断をしなければなりません。ここにも断があります。そのように、牧師を始めとする献身者の仕事も「断」と背中合わせです。ですから、献身し、神学校の門を叩くところから、この「断」を身に受けて歩き始めなければならぬし、「断」という生き方を学ぶのも献身者の大切な道のりなのです。

さて、こう「断」ということばかり強調しますと、なんだか、とても人間業に思えないと感じられることでしょう。けれども、「断」は恵みあふれる人生の入り口に立つことでもあります。聖霊が語るべき言葉を与えてくださり、鳥が肉を運んで来てくれ、天からマナが降ってくる。この恵みの出来事は、信仰に賭けて生きる者の現場にほんとうに起こるからです。

ペテロたちは「網を捨てて（また家族を捨てて）私に従いなさい」と主から言われました。「捨てて従いなさい」と聞くと（あの「富める青年」のように）顔を曇らせてしまいがちな私たちです。けれども「捨てて従いなさい」とは、考えてみればむしろ嬉しい招きでもあるのです。もしも、「従うならもっと学びなさい」「従うならもっと身につけなさい」「たくさん持って、たくさん増やして、たくさん担いで、それから従いなさい」と言われたら、いったい誰が従えるのでしょうか？ いつ、そんな日が訪れるのでしょうか？

主は「いらぬ！」と言ってくださっているのです。経験も学識も人々が目を引く能力もいらぬから従え！と。持たずに構わない、持たずに構わない。むしろ、全ては備えられることを信じて、何かを握りしめた手を開いて従ってきなさいと招いてくださっています。

献身者に求められているのは、この信仰と献身です。これを「断」と呼びたいと思えます。そして、何事かを断つ、というこのたたずまいは、主イエスに従うすべてのキリスト者が問われていることでもあるのです。

会議・委員会報告

- ◇ 第3回役員会（開催日：2月1日（土）出席者：役員・監査、事務局員）
- ▶ 昨年の総会で提起された壮年会連合規約、規約細則の改正に関する意見交換と方向性を確認した。
 - ▶ 奨学金規程および関連資料について、これまでの背景と経過を踏まえ、見直し個所について意見交換を行い、規則改定委員を選出して、成文化検討を進める方向を確認した。
 - ▶ 今年度の神学校週間の取組みについて、各地方連合の推進委員に、より主体的な働きをお願いする方策の検討と、神学校献金推進委員会議の進め方について意見交換をした。
 - ▶ 西南学院大学の学費値上げに伴う、神学生奨学金への対応について意見交換をした。
 - ▶ 壮年会連合事務局員の豊永義典兄の後任として、4/1から飯野實兄の就任が承認された。
- ◇ 第3回奨学金委員会報告（開催日：2月15日 出席者：奨学金委員、事務局員）
- 西南学院大学神学部からの報告として今春卒業予定の神学生の動静を伺った。また学費値上げについての説明があり、委員会としては神学生に勉学に専念していただくことを願い、教育充実費を奨学金に含めることを承認した。またこの件については奨学金規程の改定が必要となることから、規則改定委員会に委ねることとした。
- 2014年度神学部進学、転編入学者を対象に奨学金貸与の審査を行い、学部3年次3名、選科1年3名、大学院前期3名、専攻科2名への奨学金貸与を承認した。また貸与奨学金の償却該当者9名について確認し、推薦教会には完済通知を送ることとした。さらに前回に引き続き長期返済滞り者への対応について協議をしたが、本人との連絡が困難なケースもあることから推薦教会と連絡を取り合いながら対応に努めることを確認した。
- 返還猶予などに関する奨学金規程の改定についても具体案が出され、さらに協議を重ねたうえで役員会に対応を打診することとした。また神学生にとって神学部だけでなく研修教会や学生寮の中で共同生活することでの学びが大切だとの観点から、それらを奨学金貸与の条件とすることも視野に入れ、今後神学部と当委員会で協議することとした。
- ◇ 第2回役員・奨学金委員合同委員会（開催日：3月1日（土）出席者：役員・監査、奨学金委員、事務局員）
- ▶ 西南学院大学の学費値上げ及び教育充実費（新設）について奨学金支給の対象とすることを確認。理事会からの要請を受け、貸与奨学金を増額する。
 - ▶ 野口哲哉宣教部長より国内ミッションスタディツアーについてアピールがあった、壮年会連合としても全面的に協力し、2014年度の活動施策に織込むこととした。
 - ▶ 神学校週間の取組みの一環として、バプテスト誌（連盟）と神学校週間のしおり（壮年会連合）の共同企画を進めることを確認した。

公 告

2014年度全国壮年会連合総会開催にかかわる件

規約細則第6条の定め（60日以上前）により表題の件を通知致します。

- 開催日時：2014年8月22日（金）（第49回全国壮年大会第一日目に実施）
- 開催場所：広島市文化交流会館
- 議案：全国壮年会連合ニュースNo. 82号（7月予定）発行に合わせお知らせ致します。
- 代議員登録（規約細則第4、7条による）

◇ 派遣代議員：教会・伝道所各3名まで登録

◇ 登録締切日：7月22日（火）（総会期日30日前）… 参加者登録に合わせて

※規約細則第9条により壮年会員は議案を提出できます。7月22日（火）までに役員会に提出ください。

予 告

2015・16年度 奨学金委員長選挙にかかわる件

「日本バプテスト連盟全国壮年会連合奨学金制度に関する規程」（略称：全国壮年会奨学金規程）第5条に基づき、2014年度総会において選挙を行います。詳細は追って「日本バプテスト連盟全国壮年会連合規約 細則」第23条による「選挙監理委員会」より公告されます。

<立候補対象>

- 奨学金委員長 1名

立候補者は当選後、総会にて他の奨学金委員4名を指名し承認を得ることとなります。

日本バプテスト連盟全国壮年会連合 〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4

事務局執務時間：月、水、金 10:00～16:00

☎・fax：048-886-7533 <http://www.sonen.net> sonen@bapren.jp

振替 00150-7-669605 日本バプテスト連盟 全国壮年会連合事務局